慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	1945年10月10日「政治犯釈放」
Sub Title	A fact on the communist movement in post War Japan
Author	井上, 學(Inoue, Manabu)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2013
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics=Mita journal of economics). Vol.105, No.4 (2013. 1) ,p.761(239)- 776(254)
JaLC DOI	10.14991/001.20130101-0239
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20130101-0239

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」105 巻 4 号（2013 年 1 月）

研究ノート

1945 年 10 月 10 日「政治犯釈放」

井　上　　學

（初稿受付 2012 年 9 月 4 日，
査読を経て掲載決定 2012 年 11 月 19 日）

はじめに

本稿は，1945 年 10 月 4 日の GHQ「人権指令」によって，10 月 10 日，東京予防拘禁所（府中刑務所）から出獄した「政治犯釈放」について，同年 9 月頃の椎野悦朗による徳田球一らとの接触から，10 月 10 日「自由戦士出獄歓迎人民大会」まで，およそ一か月の経過を明らかにしようとするものである。

10 月 10 日「政治犯釈放」は，戦後変革期に主要な政治的，社会的勢力となる日本共産党の「再建」に直結した契機となったのであるが，先行研究は限られている。

関係者の証言記録はあるが，それらは激動の日々に輻輳しており，肝心な点での違いもある。短期間のことごととはいえ，経過を追跡する困難がそこにある。

本稿では，いくつかの未公刊資料も用いて，錯綜する経過を整理して叙述し，若干の「謎」を提起する。

1　10 月 10 日「政治犯釈放」

獄中「十数年にわたって常に出獄後の活動について論及していた」徳田球一にとって，「一九四五年三月には，もはや日本軍国主義は完全に敗北することが獄内でもあきらかに感ぜられた」。そして「四月から五月になると，一般囚人はもちろんのこと看守たちでさえとても勝てない，これは完全に軍閥官僚の残虐な支配のためであることを半公然と言いだすようになった」のを目撃したのである。

「しかるに公然たる戦争反対即時平和の運動はすこしもきこえてこなかった」。徳田球一はこの時，「もしわれわれにして，巧妙な非合法活動をつづけていたならば，あの時こそ断固たち上るべきであった」と後に述懐したごとく，「全く痛恨やるせない」想いをもって「その責任を痛感」し，「敗戦後の活動」に備えたのであった。(1)

1945 年 10 月 10 日，府中刑務所内東京予防拘禁所から「予防拘禁一六名」の政治犯が

出獄した。府中刑務所門前では数百名の人々が，かれらを歓呼して出迎えた。

「予防拘禁一六名」の人びとは，「徳田球一，志賀義雄，金天海，黒木重徳，西沢隆二，山辺健太郎，今村英雄，須藤末雄，松本一三，広瀬梅次，石川篤（一一名，共産党員），三田村四郎，李康勲（朝鮮独立運動家），団野徳一（天理本道），桑原幸作（天理本道），山本栄三郎（天理本道別派）」。そして「女性用予防拘禁所がなかったので別棟」に「ヨウ・フミ（葉フミイ，灯台社信者台湾人葉国燕と結ばれた）」がいた。(2)

日本敗戦（8月15日）から実に50余日。この日を迎えるために，獄中の徳田球一らと連絡をつけた椎野悦朗をはじめとして，金斗鎔，梨木作次郎，栗林敏夫，藤原春雄たち，そして3人の外国人ジャーナリスト（ギラン，マルキュース，アイザック），さらにGHQのエマーソンとノーマンなどの人々が，「政治犯釈放」に尽力，奔走していた。

「政治犯釈放」は，戦後日本社会運動における「政治主体の形成の原点」であるが，「文献も研究もきわめて手薄」である。(3)

本稿では，「椎野悦朗等座談会記録」，椎野悦朗述『徳田球一を語る』，藤原春雄主宰「戦後革命運動史」講義録，寺尾五郎「戦後直後の日本共産党と朝鮮人運動」，録音テープ「寺尾五郎氏に聴く」などの未公刊資料にも依拠して，戦後変革期における政治主体としての日本共産党再建の起点である「10・10政治犯釈放」を叙述する。(4)

「10・10政治犯釈放」運動にみられる大きな特徴は，日本人と在日朝鮮人の「一体感」である。寺尾五郎は「戦前からの運動の中で培われていた日本人と朝鮮人の一体感が，そのまま生きていた。文字どおり腕を組み肩をならべてつっ走っていた」。「そのなかで，在日朝鮮人がもっていた行動力，戦闘力は，日本人を上まわるすさまじいエネルギーとなって噴

---

(1)　徳田球一「悲しかったこと」，『大衆クラブ』創刊号1947年6月1日（『徳田球一全集』3巻，五月書房，1985年，377–378頁）。

(2)　椎野悦朗「政治犯釈放と日本共産党の労働運動方針」（『証言　産別会議の誕生』総合労働研究所，1996年，261–262頁），および「椎野悦朗　敗戦直後の足どり」社会運動資料センター（未公刊）。葉フミイ（吉沢文江）は1945年4月2日宇都宮刑務所で「刑期満了」となったが，灯台社信仰を固持，「四月十日予防拘禁に付」せられた（インターネット「灯台社を調べるぺえじ」）。葉フミイが豊多摩刑務所内の予防拘禁所にいた証言はある（今村英雄「忘れ得ぬ人々」，『獄中の昭和史』青木書店，1986年，232頁）が，10月10日，府中刑務所にいて，「一六名」とともに「釈放」されたかどうかは未詳。

(3)　吉田健二「救援運動の再建と政治犯の釈放——梨木作次郎氏に聞く」(3)，『大原社会問題研究所雑誌』No. 523，2002年6月，47頁。以下の引用では「梨木作次郎氏に聞く」(3) と表記。

(4)　これらの未公刊資料は，「椎野悦朗等座談会記録」（1982年4月から85年5月にかけて行われた「戦後革命運動史」の座談会記録，未公刊，社会運動資料センター所蔵），椎野悦朗述『徳田球一を語る』（1980年代，9回連続公開講演会の講演録，未公刊，社会運動資料センター所蔵），藤原春雄主宰「戦後革命運動史」講義録（1977年4月から78年3月まで13回，未公刊，社会運動資料センター所蔵），寺尾五郎「戦後直後の日本共産党と朝鮮人運動」（1981年11月講演稿，未公刊），録音テープ「寺尾五郎氏に聴く」（1996年10月，宮田節子・小林知子聴取，未公刊）である。未公刊資料を提供いただいた渡部富哉氏（社会運動資料センター），宮田節子氏に感謝申しあげる。

出していました。そのことをよく象徴する一つのことがらが，治安維持法の政治犯たちが釈放された一九四五年十月十日の状況でしょう」と述べている。(5)

本稿では，この特長が敗戦変革期の日本における「政治主体の形成」過程の特長でもあるとの見通しのもとに，「10・10 政治犯釈放」運動における日本人と朝鮮人のかかわりを具体的にみていきたい。(6)

【8・15 から 9 月末】

日本敗戦が天皇のラジオ放送によって伝わった 1945 年 8 月 15 日から 5 日後の「8 月 20 日」，藤原春雄は「江森盛弥の紹介で，山崎早市〔同盟通信社〕を訪問」した。「治安維持法有罪党員，収容刑務所，満期釈放者，釈放人士の消息」を尋ねるためであった。「中西伊之助も同じ用件」でそこへ来た。山崎は藤原に対して，「丸の内三菱 21 号館に梨木作次郎弁護士を訪問」したが，「反対に，徳田球一がどこの刑務所に収容されているか知っているかと尋ねられた」といった。梨木弁護士が「司法省刑政局にたずねても厳秘扱い」であり，8 月 20 日頃には，誰もが徳田球一らの所在を知らず，必死に探している状況であった。山崎は「8 月 25 日，銀座裏通り芸者置屋二階一室を借り，連絡拠点」をつくったが，ここに集まってきたひとびとの「一番の話題」は，「徳田球一，志賀義雄らはどこの刑務所にいるか。無事か，どうすれば救出できるか」ということだったのである。(7)

このような状況において，徳田らの所在情報を外部に伝える決定的な役割を果たしたのは椎野悦朗である。前出の椎野悦朗述『徳田球一を語る』によれば，その経緯は以下のようであった。

椎野悦朗が上京して，府中刑務所に徳田球一を訪ねたのは「八月末か九月初」であった。「鹿児島の鹿屋分遣隊」で敗戦を迎えた椎野悦朗は，「ようやく切符を入手して」東京に着き，「〔豊多摩刑務所から〕府中刑務所に移っていた東京予防拘禁所にやっとの思いでたどり着」いたのである。徳田は「三日位してから，もう一度来い」と「志賀義雄の従弟の藤田昇の家を宿舎に紹介」した。再訪すると，「手紙をソビエト代表部」に届けてもらいたいが「志賀が英文に直すのに一週間位かかる」ので，「一週間後もう一度来るように」といわれた。そして「一週間後」，椎野は「その手紙と金天海から朝鮮の同志金斗鎔宛の手紙を託された」のである。

椎野は「二日位かかって横浜にソビエト代表部があること」をつきとめ，「手紙を渡した」が，「マッカーサー宛になっているから，GHQ

(5)　前掲，寺尾五郎「戦後直後の日本共産党と朝鮮人運動」（未公刊）。

(6)　犬丸義一「戦後日本共産党の公然化・合法化」（五十嵐仁編『「戦後革新勢力」の源流』大月書店，2007 年）は，「政治犯釈放」の経過を簡潔に記し，「『人民に訴う』への『豊多摩組』の批判」に力点を置いて論述している。

(7)　吉田健二「終戦の和平工作と政治犯釈放のころ――山崎早市氏に聞く」（2・完），『大原社会問題研究所雑誌』No. 627，2011 年 1 月，53–56 頁。以下の引用では「山崎早市氏に聞く」（2）と表記。

に届けるように」と手紙を返された。そこで「金天海から朝鮮の同志宛の手紙を先にとどけ，GHQの場所を教わって，日比谷の第一生命ビルに行った」のである。

金天海の手紙を「朝鮮の同志」に届けた経緯は，「新宿駅のまわりには，朝鮮人グループによるビラがいたる所に貼られていたので，それを頼りに新宿の学生会館か淀橋警察の二階にあった朝鮮人政治犯釈放委員会事務所に行き，金斗鎔に会いたいと来意をつげた。彼らはこころよく高田馬場近くにあった金斗鎔たちの住家を教えてくれた。椎野はいそいでそこを訪ね感激の対面をしたという」[8]。「金斗鎔は高田馬場駅近くの散髪屋の二階に他の朝鮮人と一緒に，いわば梁山泊みたいな生活をしていたのです。私が用件を告げて金天海からの金斗鎔宛の手紙を渡したら，彼は大変感激して，早速メシを用意するやら歓迎されました」[9]。

椎野が「朝鮮の同志から場所を教わって」GHQへ行き，エマーソンに会ったのは「九月一六日ころ」であるという[10]。

山崎早市は，「9月27日，安達（同盟通信情報部長）の案内で」銀座の事務所にきたギランが「GHQ民政局にきくも返答なし，司法省刑政局は『政治犯はいない』という」ので，高津正道，藤原春雄に連絡し，同席した藤原が「徳田球一ら日共幹部10数人は府中刑務所に拘禁，面接は困難，救出協力願う」と伝えたと述べている[11]。

山崎が「9月27日，同席」したという藤原春雄は，「9月29日銀座事務所に，山崎を介してギランなど3人の外国記者」が来た。「通訳は原子林二郎」だった。「私は栗林弁護士から徳球たちが府中にいることを聞いていたので，知らせた。翌日ギランたちが府中へ」行った，と語っている[12]。

山崎と藤原の話は日時，場所が異なるが，「徳田球一たちは府中刑務所にいる」ことを「ギランなど3人の外国記者」に伝えたのは藤原春雄であることでは一致している。藤原春雄は，45年9月頃，「銀座三木ビル」を拠点に，高津正道，江森盛弥らと自由懇話会を組織し，民主主義青年会議組織活動を行っていた[13]。

栗林敏夫弁護士が「徳球たちが府中にいる」ことをいつごろ知ったのかは未詳だが，9月15日前後に椎野悦朗が金斗鎔を訪ね金天海の手紙を届けたことが，予防拘禁所政治犯の状況を栗林弁護士も知ることにつながったのではないだろうか。梨木作次郎は「市川正一，徳田球一，志賀義雄さんなど獄中政治犯の消息」は「9月の遅い時点まで，どこの刑務所に拘禁されているのか知らなかった」が，「当時，徳田さんたちがどうも府中刑務所にいるらし

---

(8) 竹前栄治『占領戦後史』双柿舎，1980年，105頁。
(9) 前掲，椎野悦朗「政治犯釈放と日本共産党の労働運動方針」，263頁。
(10) 前掲，椎野悦朗述『徳田球一を語る』（未公刊）。
(11) 前掲，「山崎早市氏に聞く」(2)，56–57頁。
(12) 前掲，藤原春雄主宰「戦後革命運動史」講義録（未公刊）。
(13) 同上，藤原春雄主宰「戦後革命運動史」講義録（未公刊），および松本健二『戦後日本革命の内幕』亜紀書房，1973年，38頁。

いという噂があって，これは朝鮮人の間で流れていて，藤原春雄さんがその噂をキャッチして泉盈之進さんに伝えられ，私も承知しておりました」と語っている。(14)

「政治犯釈放」運動において決定的役割を果たした椎野悦朗にとって，日本敗戦直後の混乱した交通事情をおしての懸命の上京，徳田球一との面会は，「獄中細胞」活動の継続であった。椎野は「出獄」する前に出獄後の活動について，徳田から「三つの指示」を受けていたのであり，「外部から連絡がとれるようになったらすぐに連絡に来い」という徳田の指示を，「空白の 50 日」において，必死に実行したのである。(15)

【10・1 から 10・10】

3 人の外国人ジャーナリストが府中刑務所を訪問した 10 月 1 日から，「政治犯釈放」が行われた 10 日に到る経過については，すでに竹前栄治『占領戦後史』が，基本的な事実を詳述している。以下では，主に同書に依って「日誌」を記す。

10 月 1 日　「午後 2 時」，ロベール・ギラン（AFP 特派員），J・マルキュース（AFP 極東支配人），ハロルド・R・アイザック（ニューズウィーク特派員）が府中刑務所を訪問，16 人の政治犯と会う。この日の「会見」は，翌日スクープ（特電）として全世界に伝えられた。

10 月 2 日　「シカゴ・トリビューン」クローミィ記者がジョージ・イシカワ軍曹（通訳）を伴って豊多摩刑務所へ行き，「中西功，イブチケイタロウ，キセキムネオ〔幾石致夫〕ら一八人の政治犯と面会」した。

10 月 3 日　夕方，朝鮮人政治犯釈放委員会の金成功，排録が朝鮮餅を持って訪問，朝鮮人民共和国の樹立告げ一同万歳。

10 月 4 日　午後 6 時 GHQ は日本政府に「人権指令」（政治的・民事的・宗教的自由ニ対スル制限ノ撤廃ニ関スル覚書）を発した。

10 月 5 日　東久邇内閣崩壊。司法省，全国検事局・刑務所宛「政治犯釈放」通告。この日以後，予防拘禁政治犯は「外出自由」になった。

10 月 6 日　「赤旗」再刊の印刷所探しに外出した松本一三は伊藤憲一とばったり会い，栗林敏夫弁護士宅へ一緒に行き，旧同志と連絡がつく。

10 月 7 日　エマーソンが府中へ行き「徳田，志賀，それにもう一人の朝鮮人共産主義者を第一生命ビルに連れてきた。面接は終日続いた」。

10 月 10 日，「正門玄関前に机」を出して出迎え者「受付係」をした松本一三は「玄関前広場に七百人近い群衆」を見た。10 時鉄門が開いた。「同志キン・トヨウ（金斗鎔）の歓迎の辞」に応え，コンクリート塀前の演壇に「同志トクダ（徳田）」「同志シガ（志賀）」「最後に同志キン・テンカイ（金天海）」が登壇した。「四百名をこえる朝鮮の同志たちの朝鮮語の歓声の嵐」のなか金天海が降壇，ただちにデモが始まった。「トクダ，シガ，キンを中心に赤熱

（14）前掲，「梨木作次郎氏に聞く」(3)，53，58 頁。
（15）前掲，椎野悦朗述『徳田球一を語る』（未公刊）。

した溶岩の流れのようにぐるぐる広場をまわるデモはいつ止むともわからなかった」。[16]

この日出迎えた人数については諸説がある。出迎えた人々の「中にゐた」中西伊之助は「数百人の出迎人は，殆んど朝鮮人聯盟の諸君だった。その中にまざってゐた日本人は僅に二三十にすぎない心細さであった」と述べ[17]，松本健二は「私は行かなかった」がそこにいた南浩栄が「府中に釈放犯を迎えた朝鮮人は五百余名であったが，日本人の数が少なかった。伊藤憲一や岩田英一などを憶えている」と語ったと伝えている[18]。宮城刑務所在獄中の袴田里見は「獄中日記　十月十日」に「午後七時のニュース」が「豪雨にもかかわらず五百名以上の出迎え」と報じたと記した[19]。豊多摩刑務所から出獄した寺尾五郎は，府中刑務所門前の人数を「一四〇から一五〇人くらい」と語っている（後述）。

人数については諸説あるが，朝鮮人が圧倒的に多かったことでは一致している。竹前栄治『占領戦後史』が「政治犯釈放運動における朝鮮人の役割が大きかったという事実。これは戦後史の中で高く評価されなければならない」と指摘しているが，「10・10 政治犯釈放」における在日朝鮮人の躍動する姿を生き生きと伝える証言は寺尾五郎がおそらく随一であろう。

寺尾五郎の証言記録は，発表時期順に，「一九四五年十月に出獄して」（『三千里』第 15 号，1978 年），「戦後直後の日本共産党と朝鮮人運動」（1981 年 11 月講演稿，未公刊），「『前衛』創刊のころ」（1）（聞き手吉田健二，『大原社会問題研究所雑誌』No. 441，1995 年 8 月），録音テープ（1996 年 10 月，宮田節子，小林知子聴取，未公刊）がある。この間約 20 年が経っているが，寺尾の証言内容は基本的に変わっていない。

寺尾五郎は 1945 年 6 月チチハルで憲兵隊に逮捕，東京九段・憲兵隊総司令部留置場に護送され，「八・一五」後，警視庁特高課により豊多摩刑務所の「未決の独房」に収監されていた。

寺尾五郎の「10・10」体験談は大要以下のようである。

10 月 10 日，豊多摩刑務所「未決の独房」にいた「寺尾，姉歯三郎，幾石致夫の三人」が「一緒に」出獄した。「神山〔茂夫〕，中西〔功〕も出た」。「その日は雨であった。豊多摩刑務所の門前には，『歓迎，出獄戦士，万歳』と大書した幕をまきつけた何台かのトラックが待っており，赤旗が林立していた。百人ばかりの歓迎の人たちのなかでわれわれはもみくちゃにされ，ただむやみと手を握られるのだが，それが全部見も知らぬ人ばかりである。そのう

（16） マツモト・カズミ「出獄前後・十月十日の思ひ出」下，「アカハタ」1946 年 10 月 13 日。

（17） 中西伊之助「日本天皇制の打倒と東洋諸民族の民主的同盟」，『民主朝鮮』1946 年 7 月号，24–25 頁。なお，中西や清水一男たちが「人民解放戦士出獄万歳！」の横断幕を作成して出迎えた事情については，久米茂「“人権指令”前後」（『共同研究／日本占領軍　その光と影』上巻，現代史出版会，1978 年，453 頁）参照。

（18） 前掲，松本健二『戦後日本革命の内幕』，148–149 頁。

（19） 袴田里見『獄中日記　一九四五年』新日本出版社，1975 年，205 頁。

ち私は迎えてくれた人々がみんな朝鮮人なのに気づいた。日本人は栗林敏夫という弁護士のほかにほんの一〇人程度」であった。「そのうちわれわれ出獄者は，手とり足とり胴上げのようにしてトラックにのせられ，そこからさらに三台のトラックに分乗して，雨の中を府中刑務所に向かった。神山や中西が先頭の車で，私は二台目に乗ったように思う。『インター』と『にくしみの坩堝』」が繰り返し歌われた」。「そのトラックの上で，私ははじめて金斗鎔と名乗る痩せた男と，朴恩哲と名乗るがっしりした男とを知った」。「豊多摩から府中まで，当時のでこぼこ道，ぬかるみ，二時間もかかったのではないか」。そのトラックの上で，尻に筵を敷き，煙草をくれ，金をポケットにねじ込んでくれ，繰り返し歌を高唱する朝鮮人たちは「私が生れてはじめて接した革命的大衆であった」。

府中に着いた。「府中刑務所門前のちょっとした広場に『出獄戦士歓迎大会』横断幕」があった。「鉄の大扉が開いて徳田たちが出てきた時，ワーッと歓声」があがった。出迎えた人数は「トラック一台二，三〇人として三台六〇～九〇人，府中刑務所前に七，八〇人，内日本人一〇人。だから一四〇～一五〇人くらいだと思う」。

2　日朝それぞれの「政治犯釈放委員会」および「自由戦士出獄歓迎人民大会」

寺尾五郎「一九四五年十月に出獄して」（『三千里』第15号）には，トラック台上で旗を振る朝鮮人たちの写真が掲載されている。この旗には「解放戦士出獄歓迎　在日本朝鮮人聯盟大森□□」の文字が見える（英文の表記もあるが，判読が困難）。結成間もない朝連〔在日本朝鮮人聯盟。全国結成大会は10月15，16日〕の組織的動員によって朝鮮人たちは「解放戦士出獄歓迎」に向かったのである。(20)

朝鮮人政治犯釈放運動委員会

中西伊之助は「政治犯釈放運動に於ける朝鮮人聯盟の輝かしい先駆的，主導的な英雄的活動」を高く評価し，その朝鮮人による「政治犯人釈放同盟」の「本部は新宿の以前の朝聯本部内にあった。そこで幾度も会合が持たれて，当時の東久邇内閣へ働きかける」とともに「更に同盟では日本人側の民主主義団体へも呼びかけて強力な運動を展開する方針を立てたのであるが，日本人側の民主主義的団体もいまだ弱体であり，日和見主義的であった」と述べている。(21)

「朝鮮人政治犯釈放運動委員会」の結成と活動は朝連結成と並行，連動していた。9月10日には「朝連結成準備委員会」が設立されていた。そして9月25日金斗鎔，朴恩哲らに

（20）　なお，『写真集朝鮮解放1年』（朝鮮民衆新聞社編，水野直樹訳，新幹社，1994年。原著1946年発行）には，「政治犯釈放」にかかわる朝鮮人の動きを示す貴重な写真が数葉収録されている。

（21）　前掲，中西伊之助「日本天皇制の打倒と東洋諸民族の民主的同盟」，25頁。

よって「朝鮮人政治犯釈放運動委員会」が組織された。[22]

「朝鮮人政治犯釈放運動委員会」の活動がいつから始まったのかは未詳であるが，9月15日頃（GHQへ行く前日）と推定される椎野悦朗と金斗鎔の「再会」が，その活動を加速させたことは十分に推測できよう。

朴慶植『解放後在日朝鮮人運動史』（三一書房，1989年）によれば，「金斗鎔，宋性徹，曺喜俊，朴恩哲，南浩栄，金正洪らは九月二十四日，民族主義者，日本人共産主義者をも含め『政治犯釈放運動懇談会』を開き，翌日『朝鮮人政治犯釈放委員会』（のち朝鮮人政治犯釈放連盟　委員長金斗鎔）を結成した」というが，この「懇談会」の様子や参加した「日本人共産主義者」については，遺憾ながら未詳である。[23]

日本人による「政治犯釈放委員会」

一方，日本人による「政治犯釈放委員会」は，主に戦前左翼運動に参加し，敗戦直後たがいの連絡を「回復」しつつあった人たち（弁護士，活動家）によって組織化された。

藤原春雄は「政治犯釈放の動きは，九月中旬，三菱二十一号館の梨木事務所で梨木，栗林両弁護士と私，内野竹千代，太田慶太郎で救援会をつくる相談をしたが，大衆的運動にまで発展させられず，情勢から立遅れた。その点朝鮮人の諸君は八・一五を民族独立の機会として，政治犯釈放運動委員会を組織していた」と語っている。[24] 藤原が「大衆的運動にまで発展」しえたかどうかで区別していることは注目すべきだろう。

「解放運動犠牲者救援会」が梨木作次郎の事務所に集まった人々（内野竹千代，泉盈之進，藤原春雄，伊藤憲一，高橋勝之，江森盛弥など）によって「再建」されたのは「10月6日」で

（22） 呉圭祥『ドキュメント在日本朝鮮人連盟』岩波書店，2009年，10頁。なお，朝連結成準備委員会事務所は，最初神田YMCAに置かれ，後に新宿奨学会ビルに移った。同ビルは，地下と1階に淀橋警察署，2・3階が朝連中央準備委員会，4階に朝鮮人留学生が寄宿していたという。朝連結成準備委員会が新宿奨学会ビルに「移転」した月日を特定できないのであるが，9月25日「朝鮮人政治犯釈放運動委員会」結成場所は，新宿奨学会ビルではないだろうか。なお本稿中で引用しているように，組織名「朝鮮人政治犯釈放運動委員会」については「運動」を記さない「朝鮮人政治犯釈放委員会」とする記述もあるが，呉圭祥『ドキュメント在日本朝鮮人連盟』に従った。また同組織名の「朝鮮人」はどこにかかるのかという問題，つまり「朝鮮人政治犯」の釈放運動か，あるいは「朝鮮人」による（日本人も含む）「政治犯釈放」なのかという問題が気にかかるが，両面をもっていたと解釈しておく。前掲，「梨木作次郎氏に聞く」（3）によれば，「金斗鎔が9月下旬栗林敏夫弁護士の名刺を持って私の事務所を訪ねてこられ」た。「用件」は「全国の刑務所に囚われている在日朝鮮人の消息を知りたいが，どうすれば確認できるか調査に協力願いたい」とのことであったという（49頁）。「朝鮮人政治犯」の釈放運動に力点があったのであろう。

（23） なお，朝鮮人による「政治犯釈放」運動組織は東京だけではなかったようだ。1945年9月（日にち未詳）「政治犯釈放推進同盟関西支部を宋性徹，金民化，宋景台らが結成」したという（姜徹『在日朝鮮・韓国人史総合年表』雄山閣，2002年）。

（24） 前掲，藤原春雄主宰「戦後革命運動史」講義録（未公刊）。

あり，「自由法曹団も 10 月 8 日に再建（大森ホテル，8 人。幹事長上村進，顧問布施辰治，山崎今朝弥）」される。この「再建」2 団体は 10 月 10 日「自由戦士出獄歓迎人民大会」の「共催」団体になった。[25]

中西伊之助は政治犯出獄を出迎えた日本人が僅かであったことについて「或は充分に連絡がとれなかったのかも知れないが，新聞紙では前々日あたりからセンセエショナルに報道してゐたからわからぬことはなかった筈である」のに「朝鮮人諸君にたいして恥ずかしくもあり，肩身の狭い思ひをした」と述懐しているが，[26] 日本人側は組織的動員力を持たなかったのである。[27]

「政治犯釈放運動」においては「朝鮮人政治犯釈放運動委員会」の組織的活動力，動員力が圧倒的であった。藤原春雄，中西伊之助，寺尾五郎たちが証言しているとおりである。しかしながら，朝鮮人と日本人の異相をいうだけでは一面的である。日朝のちがいの認識を深めるとともに，協働もみるべきではないか。日朝それぞれの委員会間には「自由戦士出獄歓迎人民大会」開催準備過程で一定の連絡関係があり，同席があった。また，後述するように「自由戦士出獄歓迎人民大会」の会場確保，進行には日本人も主体的に参画したのであり，「政治犯釈放」運動における日朝共闘，連帯の面もみてしかるべきであろう。そうしなければ，天皇制日本の敗北を待ち望み，歓喜して迎えた人々がもった日本人，朝鮮人の「一体感」に即すことにならないだろう。

藤原春雄によれば，「十月十日の政治犯釈放の歓迎集会を開くための準備会を淀橋署の二階を占拠していた朝鮮人たちの事務所でもった。朝鮮の人たちが七十人位いたろう。朴恩哲などが議長になったが，日本人は伊藤憲一，服部麦生，私，長島という東交の女性，それに吉田たち，四，五人にとどまった」という。[28]

この会合はおそらく「一〇月八日」であろう。「八日，出獄歓迎人民大会の準備会が開かれていた淀橋警察に行った吉岡保」の証言を大森実氏が記録している。「入口に『朝鮮人解放連盟』と大書した看板が目を引いた。二階にあがると，三十人ぐらいの朝鮮人同志がいた。指導者格は金斗鎔と朴恩哲で，二人が交替で議長役をやっていた」。[29]

10 月 10 日直前，「政治犯釈放の歓迎集会」準備のために，日本人と朝鮮人同席の場があり，朝鮮人政治犯釈放運動委員会の主導によって，日朝の「政治犯釈放」運動の共同会合がもたれたのである。

この日以前に両者の「合流」があったかど

（25） 吉田健二「救援運動の再建と政治犯の釈放——梨木作次郎氏に聞く」(2)，『大原社会問題研究所雑誌』No. 522，2002 年 5 月，49 頁，および前掲，「梨木作次郎氏に聞く」(3)，61 頁。

（26） 前掲，中西伊之助「日本天皇制の打倒と東洋諸民族の民主的同盟」，25 頁。

（27） 「10・10 政治犯釈放」を迎えた日本人と朝鮮人の異相の原因，事情については，梶村秀樹『解放後の在日朝鮮人運動』（神戸学生青年センター出版部，1980 年）および前掲，寺尾五郎「戦後直後の日本共産党と朝鮮人運動」（未公刊）が論及している。

（28） 前掲，藤原春雄主宰「戦後革命運動史」講義録（未公刊）。

（29） 大森実『戦後秘史 4　赤旗と GHQ』講談社，1975 年，97 頁。

うか。「政治犯釈放要求二つのグループ」「一つは金斗鎔，金成功，排録らを中心とする朝鮮人政治犯釈放委員会」「いま一つは服部麦生，高橋勝之，藤原春雄らを中心の政治犯釈放委員会」，「この両者は解放運動犠牲者救援会を作り，事務所を三菱ビル二一号館の梨木事務所においた」との記述があるが，未詳である。(30)

「自由戦士出獄歓迎人民大会」

10月10日，「自由戦士出獄歓迎人民大会」が日比谷公園で予定されていた。10月8日府中刑務所に「2回目の面会」に行った梨木作次郎は，黒木重徳に「解放運動犠牲者救援会，自由法曹団，朝鮮人団体の共催で『自由戦士出獄歓迎人民大会』の開催を予定していることについて報告」したという。(31)

しかし，「出獄した徳田，志賀ら『府中組』は二時半から日比谷公園自由戦士［出獄］歓迎人民大会に出席する予定であったが，米第八軍第一騎兵旅団司令部（旧中野憲兵隊跡）へ連行」されたのである。(32)

米第8軍第1騎兵旅団司令部へ「連行」された者以外の人々は，日比谷へ向かった。(33)

「自由戦士出獄歓迎人民大会」は日比谷公園野外音楽堂での開催を予定していたが，雨のため田村町飛行館五階講堂へ移した。「雨のため急遽変更になった会場は，いろいろあたったが焼け残ったビル少なく決まらず，軍人で飛行会館を知っていた藤田昇が借りた」のだという。(34)

「大会」に参加した人々は，「一〇〇〇人とも二〇〇〇人とも」いわれ，「半数以上は朝鮮

---

(30) 前掲，竹前栄治『占領戦後史』105頁。典拠は示されていない。なお，梨木作次郎は次のように語っている。「取り組みが朝鮮人活動家のほうが私らより早かったことは確かです。またこの朝鮮人政治犯釈放運動に，当初から栗林敏夫弁護士が一枚かんでいて協力していたのです。けれども間もなく両者の運動が合流したことは，この〔竹前栄治〕『占領戦後史』が指摘する通りです」。ただし，「『服部麦生，高橋勝之，藤原春雄らを中心の政治犯釈放委員会』この書き方は多少，事実と違います。『政治犯釈放委員会』というような名称の運動団体が結成されていたことについて私は承知していないのです。『政治犯釈放委員会』という団体は，主には私の事務所に集まった解放運動犠牲者救援会のグループを指していると思いますね。もしそうだとすれば人数も一五，六人，多くても二〇人くらいでしたよ。実際は泉盈之進，内野竹千代，伊藤憲一さんらを中心とする解放運動犠牲者救援会のメンバーや，早いうちに出獄した藤原春雄さんや服部麦生，高橋勝之，関根悦郎さんらが敗戦直前に潜行して動きだして，そして敗戦を経てこの二つの動きが一九四五年一〇月初めに私の事務所で合流した，というのが経過であり真実だと思います」（前掲，「梨木作次郎氏に聞く」(3)，50頁）。

(31) 同上，「梨木作次郎氏に聞く」(3)，61頁。

(32) 前掲，竹前栄治『占領戦後史』，151頁。

(33) 府中刑務所で出獄者を迎えた人々が，どのようにして日比谷に向かったのか，全員トラックで行ったのか，電車も使ったのかなど未詳である。朴慶植『解放後在日朝鮮人運動史』（三一書房，1989年）には「この日の午後，出獄同志たちを出迎えた大衆は十数台の乗用車とトラックを連ねて芝区田村町の飛行会館までデモ行進し『自由戦士出獄歓迎人民大会』を開催した」と記述されている（52頁）。トラックについては，朝鮮人のトラックだけではなく，10月10日，「清瀬駅前藤田農場（主人元毎日新聞記者，関東軍経理将校）のトラックが迎えにいったとか」との証言もある（石堂清倫『続わが異端の昭和史』勁草書房，1990年，65頁）。

人」であった。会場には「赤旗，太極旗が立ちなら」んだ。[35]

「主催者側」の「布施辰治，金斗鎔，中西伊之助，伊藤憲一」などが挨拶し，出獄した「酒井定吉，神山敏夫〔ママ。神山利夫〕，神山はな氏などから獄内の残虐を訴え，日本ならびに朝鮮のプロレタリアート解放を要求しその間，『人民に訴ふ』が売られ」た。大会は「午後四時五〇分閉会」し，雨中「GHQ までデモ行進」したのである。[36]

なお，会場の様子について，次のような証言がある。「会場は超満員で，出勤時の山手線の電車のようにぎゅうぎゅう詰めだった。伊藤憲一さんの司会で始まり，自由法曹団を代表して布施辰治さんが挨拶し，朝鮮人団体を代表して金斗鎔さん，それに酒井定吉さんや人民文化同盟の中西伊之助さんが演説」した。[37]また，「大会」の「舞台上にいた」椎野悦朗は，「楽屋で，民族主義者李康勲が太極旗を掲げようとし，共産主義者は引き下げろと騒動」になった。椎野は「太極旗のもとに 10 年も獄にいた奴（李）もいるんだからそいつを歓迎するために集ったなら出さねば仕方ないと思った。獄から出てきた者も出させろといっていた」という体験を語っている。[38]

「10・10 政治犯釈放」は，中西伊之助が「肩身の狭い」思いをし，藤原春雄が「情勢に立ち遅れ」た自覚をもったような日朝それぞれの主体的行動，独自の組織的結集を背後にもちつつ，寺尾五郎が語るような「敗戦直後の一時期の日本における闘いの中で，日本人と朝鮮人が全く一体となって，今からみれば無媒介の一体感ともいうべき状態であって，そうして運動が進んでいた」[39]ことを示したのである。

3　いくつかの「謎」

「8・15」から「10・10」の過程における，いくつかの「謎」を以下に記しておきたい。

(1)「2 人の朝鮮人訪問者」の姓名

10 月 4 日「人権指令」発令前に，府中刑務所に行き徳田球一らと会った人物としては「9 月初頃」に椎野悦朗，「10 月 1 日」に 3 人の外国人ジャーナリストが知られている。

ところで，志賀義雄の回想によれば，外部との「最初の連絡」がついたのは「金さんという朝鮮人政治犯釈放委員会のメンバーだった」という。「従来のように面会所でなく，直接監

(34) 前掲，「椎野悦朗等座談会記録」（未公刊）における椎野発言。会場の「飛行館」は 1929 年竣工。1970 年に解体され，跡地に現「航空会館」が 1978 年竣工（港区新橋 1–18–1）した（「航空会館」ホームページ）。なお，藤田昇は志賀義雄の「従弟」。10 月 3 日には志賀たちに「四斗樽にいっぱい牛肉を差し入れ」た（マツモト・カズミ「出獄前後・十月十日の思ひ出」上，「アカハタ」1946 年 10 月 2 日）。

(35) 前掲，竹前栄治『占領戦後史』，151–152 頁。

(36)「朝日新聞」昭和 20 年 10 月 11 日。

(37) 前掲，「梨木作次郎氏に聞く」(3)，62 頁。

(38) 前掲，「椎野悦郎等座談会記録」（未公刊）。

(39) 前掲，寺尾五郎「戦後直後の日本共産党と朝鮮人運動」（未公刊）。

房まで入って来てもらって，〔金さんが持ってきた〕付近の同情者から贈られたふかしたてのさつまいもを食べながら一同『万歳』を叫んだ」というのである。(40)

松本一三は「出獄前後・十月十日の思ひ出」（下）において「この日〔3日〕の夕刻には政治犯釈放運動委員会の代表キン・セイコウ，ハイテツの両氏がわれわれを訪ねてきた。われわれはまず朝鮮の独立を祝賀するため，同志トクダの発声で『朝鮮独立万歳』を三唱，それから両氏がお土産にもってきてくれた朝鮮の餅と府中在住の一朝鮮労働者がわれわれのために自分の畑からとって蒸してくれたという甘藷を，ふかい感謝にみちて皆でわけあって食べながら歓談」したと記している。

さらにまた，今村英雄は「我々のことが新聞に発表〔外国人ジャーナリスト3人訪問記事〕されてすぐ慰問隊がやってきた。慰問隊一番手は朝鮮人の金成功（成功の字は不正確，セイコウ――原文にある補記・井上），崔哲〔こちらには補記はない・井上〕の二君」であったと述べ，「燃えるような復讐心，敗北を知らない戦闘力をこの二人の訪問者はそのからだに現していた」「政治的意識，政治的感覚の点では，日本人が遥かにおくれていることを直感した」「金君は特に快活な青年，側の者をひきづりこむような話しぶりで，ラヂオ〔天皇の放送〕をきいた時の感動を語った」と述べている。(41)

「最初の訪問者」であったかどうかはともかくとして，10月3日夕刻，2人の朝鮮人の訪問が「慰問隊」としては最初であった。

この2人の朝鮮人の訪問は，労働省編『資料労働運動史』昭和20・21年には「十月三日，政治犯人釈放運動委員会の金成功，排録の両氏が，徳田，志賀，金天海らと連絡のため訪問」と記され（890頁），既述したように，竹前栄治『占領戦後史』でも「一〇月三日夕方，朝鮮人政治犯釈放委員会の金成功，排録が朝鮮餅を持って訪問，朝鮮人民共和国の樹立告げ一同万歳。府中在住朝鮮人労働者，自家製ふかし甘藷持参」と記述された。

ところで，以上のように伝えられている朝鮮人は，「金さんという朝鮮人政治犯釈放委員会のメンバー」，「政治犯釈放運動委員会の代表キン・セイコウ，ハイテツの両氏」，「慰問隊一番手は朝鮮人の金成功（？），崔哲の二君」，「朝鮮人政治犯釈放委員会の金成功，排録」とまちまちであり，二人の朝鮮人の姓名はこれまで未詳のまま追究されていない。

特定する資料には行き当っていないのだが，当時の在日朝鮮人運動の事情から推測して，「金さん」「金成功」と記録されている人物は「金正洪」ではないだろうか。そして「排録」あるいは「崔哲」と記録された人物は「裵哲」の可能性はないだろうか。

金正洪は，1906年生，9月10日開催の朝連結成中央準備委員会に参加，朝連結成大会（10月15，16日）では副委員長に選出される。

---

(40) 『現代史を創る人びと　2』毎日新聞社，1971年，175頁，および志賀義雄「狂瀾怒濤の時代を生きて」（『ドキュメント志賀義雄』五月書房，1988年，141頁）。

(41) 今村英雄『予防拘禁所の記録』政経ヘラルド，1976年，214–215頁。

「朝連結成当初，中心的な活動を行った一人」である。また裵哲は，朝連結成直後の常務委員（地方部担当）である。(42)

つまり上記した「諸説」中，松本一三の回想記の「政治犯釈放運動委員会の代表キン・セイコウ，ハイテツの両氏」という記憶がもっとも「正確」であり，志賀をのぞく他はこの松本一三証言をもとにしつつ，漢字表記を誤ったのではないかと推測される。いずれも，いまは一つの推測として記しておく。

(2) 「豊多摩組」の釈放について——府中へ行ったか？

「10・10 政治犯釈放」における在日朝鮮人の躍動する姿を生き生きと伝える随一の証言として，先に寺尾五郎の証言を紹介したのであるが，この臨場感あふれる寺尾の「体験」はいつのことであろうか。寺尾はいくつかの証言の場で一様に，豊多摩から府中へ向かうトラック上，府中刑務所門前の見聞としている。筆者（井上）も直接寺尾氏から聞いたことがあり，これまでそのとおりに理解してきたのであったが，豊多摩から釈放された神山茂夫や中西功らは，寺尾「証言」と異なって，府中には行かず，「府中組」が豊多摩に来たのだと証言しているのである。

神山茂夫『わが遺書』（現代評論社，1975 年）によれば，神山茂夫は「10・10」ではなく，一日前の 9 日「幣原内閣成立日」に豊多摩刑務所を「出所」した。そして「拘置所に近い鷺ノ宮の古在由重の留守宅で若い同志たちと一夜語りあかし，明日の『解放』にそなえ」たという。

「十月十日，私は朝早くおきて拘置所にのりこ」んだ。「拘置所の鉄門が八文字に開かれた。秋雨の中を，私たちは隊伍をくみ，赤旗の歌やインタナショナルを歌いながら表にでていった。門前の広場を遠巻きにして，たくさんの人が赤旗をふりふり万歳を叫んでいた。その中から，真先にかけつけてくれたのが，その朝府中で解放された徳田・志賀・故黒木らであった」のだ。

中西功も『死の壁の中から』（岩波新書，1971 年）で「十日出獄ということになり，私たちは用意万端をととのえてまちました。門の前にはかなりの人が出迎えにきてくれていました。そのなかに朝鮮の人たちがかなりいてくれたことは感激的でした。アメリカ軍のバスにのって府中組がつき，それに同乗することになったのですが，（略）下ろされたところは，近くの中野憲兵学校跡でした」と述べており，いずれも「府中組」が豊多摩に着いたと記している。

また内山弘正も，「10 月 10 日。小雨。〔豊多摩刑務所〕門前に赤旗，歓迎の人々」。「府中の予防拘禁所の人たちも来る。『あれが徳田，あれが志賀だ』の声。そこへ米軍の輸送車がきて解放された者は乗れという。びっくりしたが徳田が『心配ない』というので皆乗る。連れていかれたのは近くの元憲兵学校」と記している。(43)

志賀義雄の証言でも同様である。志賀は，

（42） 前掲，呉圭祥『ドキュメント在日本朝鮮人連盟』，6，16–18 頁。

「一〇月一〇日当日，飛行館で歓迎会開く手はず。トラックに乗るとアメリカ軍の命令で，途中豊多摩刑務所に立ち寄って，ここから出た人たちとともに一時旧日本軍の中野学校跡の米第八軍第一騎兵師団司令部に収容された」という。[44]

寺尾五郎の，豊多摩から「三台のトラックに分乗して」府中へ向かい，府中で「米軍の幌付ジープ」に乗せられ「中野，元警察学校」へ行ったという記憶，証言をどのように解すべきなのだろうか。いまのところ，記憶の混線かとも思われるこの問題を解きほぐす手立てがみつからないのだが。

(3) 「人民に訴ふ」の署名者について

「自由戦士出獄歓迎人民大会」会場では，「人民に訴ふ」が飛ぶように売れた（一部 80 銭，千部以上）。「人民に訴ふ」は，「我々の目標は天皇制を打倒して，人民の総意に基く人民共和政府の樹立にある」ことを，7 項にわたって訴えた「出獄声明文」である。

ところで，いまわれわれがみる「人民に訴ふ」の署名者は「日本共産党出獄同志　徳田球一　志賀義雄　外一同」である。しかし，この署名者には「金天海」の名もあったとの証言資料がある。

志賀義雄は「『人民に訴ふ』は徳田が執筆したもので，政治犯釈放の決まった翌日，私にその原稿を示した。その中には，のちに問題となった『連合軍は解放軍だ』という一句があった。『これは削除した方がいい』と私がいうと『いや，連合軍にはソビエト軍もふくまれている。アメリカ軍だけが勝手な真似をしないためにも，こう書いておいた方がよい。それに連合軍は今後の日本の民主化を推進するからだ』と徳田は答えた。また，署名者は徳田球一，志賀義雄，金天海の三人にしようともいった」と述べている。[45]

この文中の「署名者は徳田球一，志賀義雄，金天海の三人にしようともいった」のはだれであるか不明だが，文脈からは徳田の発言だと思われる。

志賀義雄は大森実のインタビューにおいても，「「『人民に訴ふ』には三人の名前が出てますね。あなたと徳田球一と金天海」との問いかけを否定していない。[46]

この「人民に訴ふ」の作成，印刷の経過は，以下のようであった。

10 月 4 日，GHQ が政治犯釈放命令を日本政府に出した。「徳田はこれを知ると，一晩で出獄声明文『人民に訴ふ』を書き上げた」。そして「この声明文とあわせて，徳田は先に書

---

(43) 内山弘正「敗戦時の豊多摩刑務所」（『獄中の昭和史』青木書店，1986 年，120 頁）。

(44) 前掲，志賀義雄「狂瀾怒濤の時代を生きて」，142 頁。なお，志賀義雄『日本革命運動の群像』合同出版社，1956 年にも同様な記述がある。

(45) 同上，志賀義雄「狂瀾怒濤の時代を生きて」，142 頁。

(46) 前掲，大森実『戦後秘史 4　赤旗と GHQ』収録の「志賀義雄インタビュー」，287 頁。大森実の「三名」説の根拠は未詳。なお，『徳田球一全集　第 6 巻』（五月書房，1986 年）収載「徳田球一年譜」（社会運動資料センター編）は「一九四五年 10・10　徳田，志賀，金天海の連名で『人民に訴う』発表」と記している。

きあげていた論文『闘争の新しい方針について』を，戦後再刊された『赤旗』第一号にのせることを『獄内細胞』に提案した。私たちはこれに賛成した」のである。[47]

志賀義雄は「人民に訴ふ」は「徳田が執筆，政治犯釈放が決まった翌日〔10・5〕，私にその原稿を示した」というから，「『獄内細胞』に提案」したのは「一〇月五日」であろう。この「獄内細胞」協議者については「徳田は，志賀，金天海，黒木重徳らと獄内で準備した文書『人民に訴ふ』を発表」との資料があり，[48] 金天海も参加していたと推察される。

10月6日，松本一三が「赤旗」の印刷所を探しに「外出」し，途中で伊藤憲一と会った。2人は府中へ戻って，「人民に訴ふ」「闘争の新しい方針について」の原稿を受取った。[49]

「『人民に訴う』をふくむ『再刊赤旗』第一号の原稿を受取」った伊藤憲一は「知人の稲荷町桂山光太郎宅〔東京都下谷区北稲荷町二四番地桂山印刷所〕へ府中刑務所から直行し，印刷を依頼，引き受けて」もらった。「最初の原稿」は「アメリカ帝国主義とマッカーサーをこっぴどくやっつけてあった」ので，それを「書き替える一幕」もあった。「松本一三君が獄衣のまま府中刑務所から桂山に通って校正に当たった。そんな訳で『赤旗』は十日に間に合わず，『人民に訴う』だけが刷り上った」という。[50]

「人民に訴ふ」の印刷が完了したのは，10月8日であった。「できあがったのが一〇月九日。伊藤がリュックサックに入れてもってきた」[51] というから，府中へは，10日「人民大会」の前日に届けられたのであろう。

10月10日朝，桂山印刷所から「五千部ばかり」の「人民に訴ふ」を，吉岡保がオート三輪で「自由戦士出獄歓迎人民大会」会場へ運んだのである。[52]

上記した経過からみて，印刷過程で「人民に訴ふ」の「署名者」が変更された可能性は少ないように思われる。はたして，「五日」の「獄内細胞」討議で「三名」案が「二名に決定」されたのか，あるいは当初から，いまわれわれがみるように「日本共産党出獄同志　徳田球一　志賀義雄　外一同」であったのか，大きな謎ではある。

おわりに

日本敗戦にともなう戦後変革期の一つの特長は，戦争をひきおこした日本軍国主義者を糾弾し，「食と職」を要求する日本人と，日本の植民地支配から「解放」され，自らの結集体をつくり，公然と社会勢力として決起した在日朝鮮人が，日本社会運動に「一体」となっ

---

(47) 松本一三「東京予防拘禁所の回想」（前掲，『獄中の昭和史』，195–196頁）。
(48) 井上敏夫「徳田球一評伝」（『記念誌徳田球一』徳田球一顕彰記念事業期成会，2000年，37頁）。
(49) 前掲，竹前栄治『占領戦後史』，128頁。
(50) 伊藤憲一『南葛から南部へ　解放戦士別伝』医療図書出版社，1974年，2–3頁。
(51) 前掲，大森実『戦後秘史4　赤旗とGHQ』収録「志賀義雄インタビュー」の志賀発言，286頁。
(52) 同上，大森実『戦後秘史4　赤旗とGHQ』92，97頁。

て立ち現れたことである。「政治犯釈放」運動は，その第一歩であった。「10・10 政治犯釈放」の場では，日本人と朝鮮人の「無媒介の一体感とでもいうべき状態」（寺尾五郎「戦後直後の日本共産党と朝鮮人運動」）が噴出した。

本稿で明らかにしたように，「政治犯釈放」運動において，日本人と朝鮮人は，それぞれの主体的行動，独自の組織的結集を背後にもちつつ，一定の連携と協働を行った。「10・10 政治犯釈放」以後，日・朝それぞれの独自の運動と相互の矛盾が顕在化してくる戦後変革期をとおして，本稿が対象とした「10・10 政治犯釈放」における「無媒介の一体感」が，どのように変化，発展していくかを辿ることが今後の課題である。

（社会運動史研究者）